

小学校の音楽教育現場への「実技教育支援コーディネーター」配置の効果 —福岡教育大学におけるプロジェクトの成果と課題—

Effects of the placement of practical music education support coordinator
in elementary music classroom
— Results and continuing issues of a project in Fukuoka University of Education —

木村 次 宏
Tsugihiko KIMURA
(音楽教育講座)

東 小 路 恵 美*
Megumi HIGASHIKOJI
(東京都足立区立花保小学校)

(平成26年9月19日受理)

要 約

本研究は、文部科学省概算要求特別経費プロジェクト『実技教育支援コーディネーターの養成と配置効果の科学的検証 (平成23年度～25年度)』における音楽科の取り組みについて、その成果と課題を考察・検討しまとめたものである。そこでは現職教員と実技教育支援コーディネーターとの協同的な指導体制での音楽活動の運営が教員及びコーディネーターの双方の側の教育実践力向上に大変有効に機能したことが明らかになった。今後もこのような連携事業を通して、教育支援体制を構築していくことがより一層求められる。

キーワード：実技教育支援コーディネーター、教育実践力、潜在的カリキュラム、連携事業

1. はじめに

福岡教育大学では、平成23年度から25年度までの3年間、音楽教育講座・美術教育講座・技術教育講座の3講座と、本学の地元である宗像市教育委員会及び研究拠点校(小学校)による連携事業として、『実技教育支援コーディネーターの養成と配置効果の科学的検証－図画工作・音楽・書写の「実践知」習得を基盤とした「潜在的カリキュラム」の開発－(文部科学省概算要求特別経費プロジェクト)』というテーマで、小学校の教育現場において図画工作・音楽・書写に関する専門的な知識や技能を備えた実技教育支援コーディネーターを配置することによって、実技教育における「実践知」習得を基盤とした教育支援体制を構築し、学校におけるOJT(校内における研修並びに同僚間による学び合い、教え合いを通して、職務遂行等に必要なる力の育成を図ること)を推進しながら自律的研修制度を確立し、実技教科に関する教育実践力の質的向上を目指すとともに、実技教育場面でのポジティブな傾向の「潜在的カリキュラム(hidden curriculum)」を構築・形成することを目的として研究に取り組んだ(図1)。本論文では、その中の音楽科の取り組みにおける成果と課題について考察・検討しまとめることにする。

小学校では、音楽や図画工作や書写等の実技指導を伴う授業実践に対して苦手意識をもっている教師が少

なくない。木村(1998)が福岡県内の小学校教師を対象として実施した音楽科学習指導に対する意識調査(回答者315名)においても、「音楽科の授業を実践するのは他の教科と比べて難しいと思いますか」という

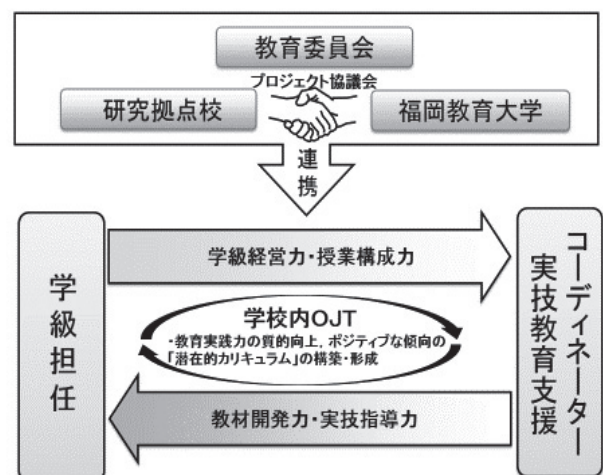


図1 プロジェクトの取り組みの概要

* 本学大学院教育科学専攻音楽教育コース 平成25年3月修了生

質問に対して、“難しい”または“少し難しい”と答えている教師が、教職経験の長さに関係なく70%前後に達している。また「音楽科の授業（それぞれの領域）で指導が難しいと感じる点を書いて下さい」という質問に対しても、教材研究については約40%、指導方法については約75%、さらに演奏技能や音楽的知識に関しては80%以上の教師が課題として感じているという実態が明らかになっている。このことは小林ら（2010）が行った調査においても類似した結果が報告されており、“ピアノが弾けない”、“リコーダーや鍵盤ハーモニカの指導方法が分からない”、“教材研究の時間が十分に確保できない”等の教師の切実な悩みが浮き彫りとなっているし、黒木（2010）も、自身自身の小学校での音楽専科教員としての経験を踏まえながら、音楽づくりと鑑賞の指導や評価の方法について不安を抱いている教師が多いこと、教科外においても音楽関係の特設クラブの指導、音楽朝会や入学式・卒業式等の学校全体に関わる企画・運営力等も求められることなどについて報告している。ただ木村の調査では、学校での音楽指導において上述のような課題を抱えているにも関わらず、小学校教育における音楽科（活動）の果たす役割について、ほぼすべての教師から、“豊かな心や美しいものに感動する心やコミュニケーション能力、自己表現力等の育成にとって非常に重要な役割を果たし得る”という回答を得ており、音楽科（活動）の存在意義が教師によって十分認識されていることをうかがい知ることができる。

ところで「潜在的カリキュラム」とは、正規の教育課程による、いわゆる「顕在的カリキュラム」とは別に、無意図的に学習者に伝わる知識や行動、思考等の様式及びその過程のことで、学校での様々な生活または学習指導場面において学習者にポジティブあるいはネガティブな教育的影響を与えるものであり、“顕在的カリキュラム”にも何らかの作用を及ぼす可能性がある知識、行動規範や価値（思考様式）、態度等を示している。小学校では、実態として音楽や図画工作、書写等の実技指導を伴う教育実践に対して苦手意識をもっている教師は少なくなく、その意識が児童にネガティブ傾向の「潜在的カリキュラム」を形成し得る一要因となってしまうことが危惧される。本プロジェクトでは、教師のこのような苦手意識が「潜在的カリキュラム」として児童に少なからずネガティブな影響を与えてしまうことを回避（軽減・解消）し、ポジティブな学習環境の構築・形成を図ることも一つの目的としている。本学においては、宗像地区とのこれまでの連携から確認した学校教育現場のニーズの一つとして、音楽・図画工作・書写等の実技教育に対する支援の要請は決して少なくなく、音楽教育講座としてもそれらの要請を受けて、現在まで授業や学校行事における音楽活動（合唱や伝統音楽等）の指導の支援の取り組みを推進しているところである。

2. プロジェクトの取り組みの概要

本プロジェクトは、(図1)に示したように、福岡教育大学(音楽教育講座・美術教育講座・技術教育講座)と、地元の宗像市教育委員会、研究拠点校等から選出された委員によるプロジェクト協議会を組織し、その計画・準備・実施等について継続的に協議・検討しながら取り組みを進めた。年度計画の概要については(表1)の通りであるが、そこでは1年次の平成23年度を試行段階として、23年度は1校、24年度と25年度は各3校にコーディネーターを配置し、3年間研究に取り組んだ。

音楽科実技教育支援コーディネーターに関しては、(表2)のように3年間で非常勤・常勤講師の形で配置した。その人選は、本学の卒業生または大学院生で、小学校あるいは中学校（高等学校）[音楽]の免許状を取得している者を対象として、①大学側で適格候補者を選定する、②プロジェクトの目的等について説明する、③了解を得る、という手順で決定した。最終的な配置に関しては、プロジェクトの配分予算やコーディネーターの就職活動等の関係もあり、結果として(表2)に示したようになった。そこでは、平成23年度は本学大学院の音楽教育コースに在籍する院生を非常勤講師として1名（学部も本学を卒業しており、小学校及び中学校[音楽]・高等学校[音楽]の1種免許状を取得、大学院修了後は専修免許状を取得）、平

表1 プロジェクトの年度計画の概要

| |
|--------------------------------------|
| 平成23年度(1年次…試行段階) * 1校配置 |
| ○プロジェクト協議会を組織 |
| ○実技教育支援コーディネーターの養成と選出 |
| ○コーディネーターの配置及びその効果の現状分析 |
| ○教材開発・教科専用教室等の環境整備 |
| ○専科指導に関する調査・分析等 |
| 平成24年度(2年次) * 3校配置(音楽科は2校) |
| ○教育実践力向上に向けた教材開発・指導方法等の改善 |
| ○学習環境の整備と配置効果の検証・改善 |
| ○ポジティブな「潜在的カリキュラム」の構築・形成に向けた研修制度の確立等 |
| 平成25年度(3年次) * 3校配置(音楽科は1校) |
| ○教育実践力向上に向けた教材開発・指導方法等の改善 |
| ○コーディネーター配置の効果の検証・改善 |
| ○事業成果のとりまとめ等 |

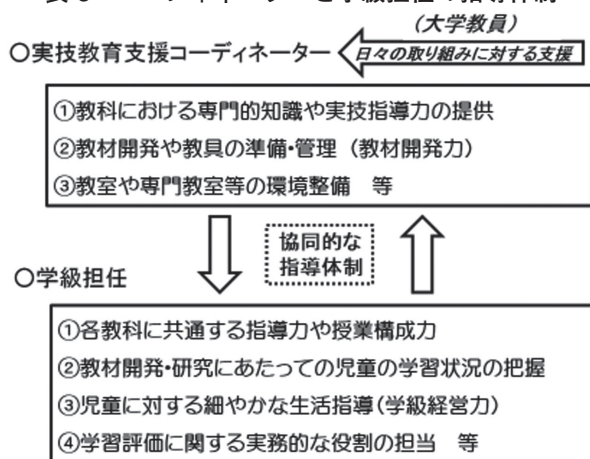
表2 音楽科実技教育支援コーディネーターの配置

| | |
|--------|-------------------------------|
| 平成23年度 | ・A小学校 非常勤：1名(週2日・院1年*) |
| | *小1・中1・高1種免許状取得者(院修了後専修免許状取得) |
| | 経 |
| 平成24年度 | ・N小学校 非常勤：1名(週2日・院2年) |
| | ・J小学校 非常勤：1名(週2日・卒業生**) |
| | **小1・中1・高1種免許状取得者 |
| 平成25年度 | ・J小学校 常勤：1名(卒業生***) |
| | ***小2・中1・高1種免許状取得者 |

成 24 年度は 23 年度から継続の大学院生 1 名と、本学初等音楽選修の卒業生（小学校及び中学校〔音楽〕・高等学校〔音楽〕の 1 種免許状を取得）1 名の非常勤講師を計 2 名、平成 25 年度は本学中等音楽専攻の卒業生（小学校の 2 種免許状及び中学校〔音楽〕・高等学校〔音楽〕の 1 種免許状を取得）を常勤講師として 1 名、という支援体制で取り組んだ。勤務時間は、8 時 15 分から 17 時までで、原則として残業はなし（学校行事等の関係で指導がどうしても必要な場合は、勤務日以外でも超過勤務として出勤することもあった）。授業は、週 2 日の非常勤講師の場合は 5 年生と 6 年生（つまり高学年）を担当した。平成 25 年度の常勤講師の場合も勤務時間は同様であったが、授業は学校と相談の上、1 年生・4 年生・5 年生・6 年生を担当した。

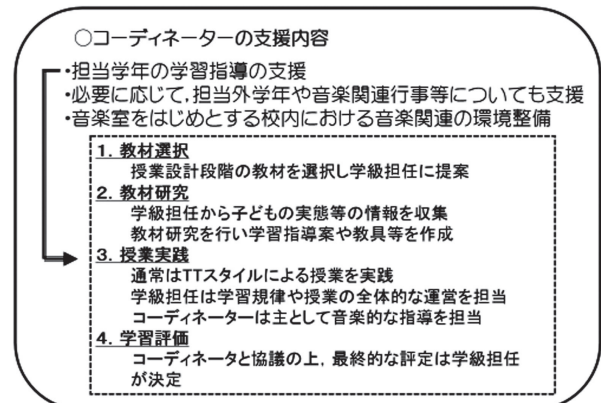
なお今回の取り組みでのコーディネーターは、授業に関しては、単なる専科的な教科指導という立場ではなく、通常は TT のスタイルを原則として、学級担任と協同的な指導体制の中で進めていった。そこでは（表 3）のように、学級担任は学習規律や授業の全体的な運営を、コーディネーターは音楽的な指導や教室等における学習環境の整備を、主としてそれぞれ担当している。もちろんその役割分担はあくまで原則で、授業の内容や学習の展開によって柔軟に対応した。その中で大学教員も、主にコーディネーターと定期的に連絡を取りながら題材構成や授業づくり等に関してアドバイスを行ったり、実践状況についての報告を適宜受けながら日々の取り組みに対する支援を行った。

表 3 コーディネーターと学級担任の指導体制



ところで学習指導等の支援に関する具体的な内容については（表 4）に示したが、授業設計段階の＜教材選択＞は、各学年の教師にコーディネーターが教材を提案し協議するような形をとった。＜教材研究＞は、まず子どもの実態等について学級担任を通して把握しながら、コーディネーターが検討し指導計画・学習指導案を作成した。それと関連して、教具等についても主に

表 4 コーディネーターの支援内容



コーディネーターが作成した。また実際の＜授業実践＞は、学級担任とコーディネーターとで事前に役割分担を確認して、原則として TT の形態をとって行った。そしてテストや学期末等の＜学習評価＞は、学級担任とコーディネーターが情報交換しながら協議を行ったが、最終的な評価に関しては学級担任が決定した。

コーディネーターは、担当授業以外でも音楽発表会や入学式・卒業式・学年集会等における音楽活動関連の指導、さらに授業担当学年以外の学習指導等についても、その都度、関係教員と打ち合わせをして可能な範囲内で支援を行った。

3. プロジェクトの成果と課題

今回の取り組みを通しての成果と課題について、学習環境の整備、学習指導の支援の順に述べる。

(1) 学習環境の整備

（写真 1）のように、授業で使用する資料に関しては、模造紙に拡大歌詞・楽譜や情景画を書（描）いたり、ラミネーター等を利用して文字や音符だけではなく写真等の資料も授業の中で効果的に活用するための教具（掲示物）として作成した。（写真 2）は、書写・図画工作のコーディネーターと共同で拡大歌詞を制作した（書写のコーディネーターが歌の歌詞を模造紙に書き、図画工作のコーディネーターが挿絵を描いた）ものであるが、これは廊下に掲示して、行事等の歌の練習のためにも使用した。また（写真 3）のように、伴奏 CD や音楽 CD を作成してそれらを各クラスに配布し、必要に応じて指導に活用してもらうようにした。

このような学習環境の整備は音楽室だけではなく、音楽室前や各学年の廊下や階段のスペースも活用して掲示の工夫を行うようにした。（写真 4）は、音楽室につながる階段スペースに音階やその音の五線譜上の位置、鍵盤上で位置等を音高順に掲示したり、廊下のスペースに音符の長さ等の資料を掲示したものである。

さらに音楽準備室の楽器庫の整理整頓も行った。楽器庫は学校によってはかなり雑然としていて使い勝手

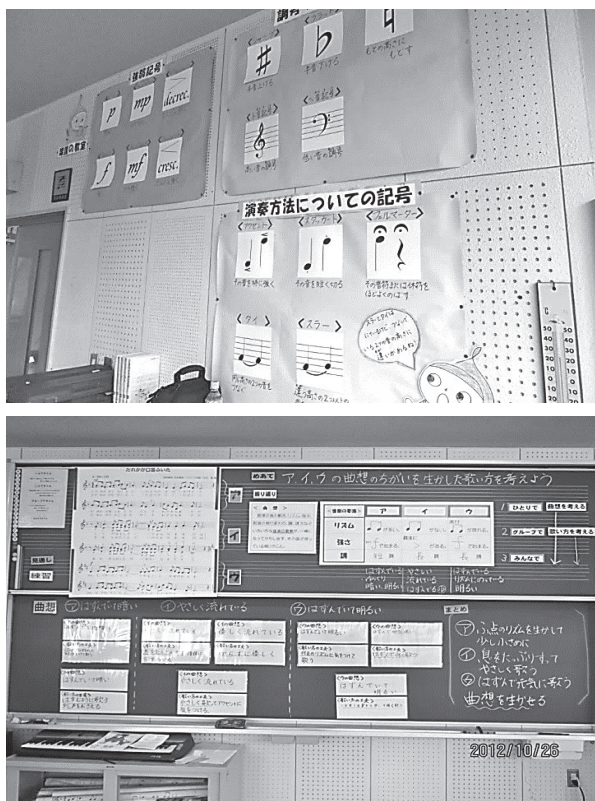


写真1 教室内の掲示物や板書の工夫

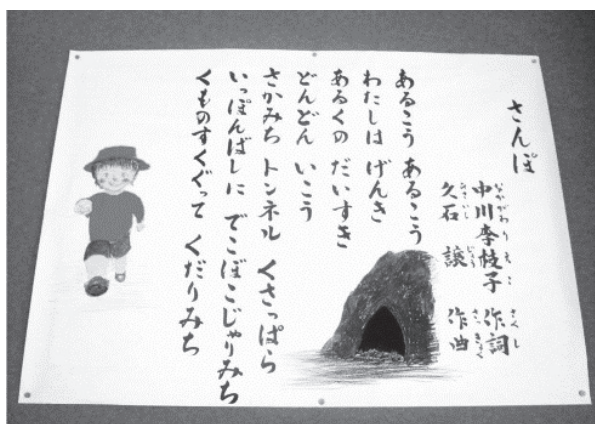


写真2 コーディネーターの共同制作による拡大歌詞



写真3 コーディネーターが作成した伴奏等のCD

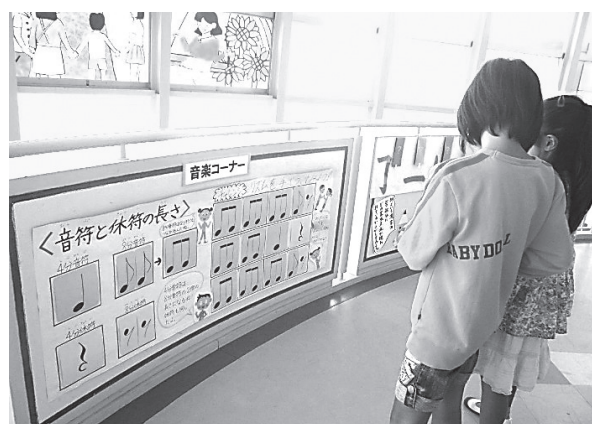


写真4 階段や廊下のスペースを活用した掲示の工夫



写真5 楽器庫の整理整頓

が悪くなっている場合も少なくないし、そのためにせっかく備品として所有されている楽器が使用されないまま楽器庫に眠ってしまっているケースも見受けられる。そのような状況を改善するためにも、今回改めて楽器庫を整理整頓し、(写真5)のように、楽器を収納している棚にその楽器と名前が入った写真を貼ることによって、児童が楽器をすぐに取り出したり、正



写真6 楽器配置図

しい場所に返却できるようにした。また(写真6)のように、楽器庫全体の配置図も作成し、一目で楽器の収納場所が分かるようにした。

(2) 学習指導の支援

(写真7)は、授業の様子であるが、前述したように通常はTTによる協同的な指導体制をとりながら授業を進めており、そこでは学級担任は学習規律や授業の全体的な運営を、コーディネーターは音楽的な指導や教室等の学習環境の整備を主として担当している。もちろんその役割分担はあくまで原則で、授業の内容や学習の展開によって柔軟に対する場合もある。

(表5)は、ある授業の1単位時間における学級担任とコーディネーターの働きかけを区分したものである。さらにそれを音楽的な指導・支援とそれ以外の指導・支援とに色分けしてみた(音楽的な指導・支援に網掛けを施した)が、やはり学級担任は児童の音楽的な学習活動が効果的に展開されるようにするための補助的な説明や学習規律の維持、児童の発表支援等に、またコーディネーターは音楽の専門性を生かした指導や音楽的な学習活動の支援等に主として従事しており、それぞれの立場を生かした役割分担をしながら、授業を進めていることがよく分かる。

小学校における音楽科の授業形態としては、①学級担任による授業、②専科教員による授業、③ゲストティーチャー(GT)とのTTによる授業等が考えられるが、今回の取り組みでは、実技教育支援コーディネーターは専門的知識・技能が求められているという点では専科教員に近いものがあるし、また学級担任とTTで授業を行うという点ではゲストティーチャーとも近いと考えられるが、授業の中での学習指導の役割分担において、(表6)に示したように明らかな違いが見られる。ここでは授業内での指導を、便宜的に専門指導とそれ以外の学習指導に分けて説明すると、①学級担任による授業では、学級担任が専門指導と学習指導を一人で担当している。②専科教員による授業でも、専



写真7 学級担任とコーディネーターによる授業の様子
(左側がコーディネーター、右側が学級担任)

科教員が専門指導と学習指導を一人で担当している。③ゲストティーチャーとのTTによる授業では、一般的に学級担任は児童が効果的に専門指導を受けることができるように学習規律及び学習支援等の全般的な学習指導を担当している。④実技教育支援コーディネーターとのTTによる授業では、コーディネーターと学級担任が共に専門指導と学習指導に(その関わり方の配分は異なるが)関わっている。というように実技教育支援コーディネーターとのTTによる授業では、より効率的・効果的な授業を展開することができる。

4. おわりに

以上、今回のプロジェクトの音楽科における取り組みについて述べてきたが、「実技教育支援コーディネーター」の配置に関して、その効果を次のようにまとめることができる。

- ・コーディネーターを配置することによって、音楽の専門性(知識・技能)を生かした授業実践や学校行事等での音楽活動の支援が可能となり(特に高学年において)、子どもたちが楽しみをもって音楽を学ぶことができるようになった(音楽好きな児童が増えた)。
- ・学級担任とコーディネーターがお互いの立場を生かした体制で学習指導と専門指導に携わることによって、一人の児童の指導にかかる時間が増え、子どもの学習内容に対する理解が深まった。
- ・音楽的知識や演奏技能習得のための指導をコーディネーターに支援してもらうことで、学級担任も音楽授業の指導方法等について学ぶことができた(教師に音楽授業の取り組みに対する意識の変化が見られた)。
- ・授業、学校行事や学習発表会で演奏する合唱や朗読劇のピアノ伴奏等のCDをコーディネーターが自主制作し、それらを活用することによって効率的・効果的に指導を展開することができた。
- ・授業の空き時間の中で、児童の伴奏指導や自分の授業担当以外の学年の指導支援、楽器室の整備等にも

表 5 学級担任とコーディネーターとの TT による授業実践例

| | 学習活動・内容 | 学級担任 | コーディネーター |
|--------------------------------|--|--|---|
| 導入 | 1. 前時を振り返りながら発声練習をする。 2. 本時の楽曲に出合い学習のめあてを話し合う。 (ア)《星空はいつも》を聴き、曲想について気付いたことを話し合う。 (イ)本時のめあてをつかむ。 | ・指揮 ・発表する児童の指名 ・めあての誘導 | ・ピアノ伴奏 ・発表内容の板書 ・めあての提示 |
| めあて：旋律の特徴の違いを生かした歌い方を考えよう | | | |
| 展開 | 3. 旋律に合う歌い方について考えを交流する。 (ア)歌った後、自分で感じたことを考えて書く。 (イ)グループで交流する。 (ウ)全体で交流する。 | ・活動についての説明 ・板書の準備 ・グループの学習活動の支援 ・学習規律 | ・学習活動の準備 ・個人の学習活動の支援 ・グループの学習活動の支援 ・全体の音楽表現をまとめる |
| 終末 | 4. 交流でまとめた歌い方を取り入れて歌う。 | ・録音機材の準備 ・指揮 | ・歌い方の指導 ・伴奏 |
| | 5. 本時の学習のまとめをする。 (ア)録音した歌を聴く。 (イ)本時の学習の振り返りをする。 | ・聴いた感想の整理 ・まとめ | ・聴くポイントの提示 ・学習規律 |
| まとめ：Aをなめらかに、Bを弾んで歌うと旋律の特徴が生かせる | | | |

*学級担任とコーディネーターの役割について、音楽的な指導・支援とそれ以外の指導・支援とに分類するために、音楽的な指導・支援については網掛けを施した。そこでは、コーディネーターは主として音楽の専門性を生かした指導、音楽的な学習活動の支援等に関わり、学級担任は音楽的な学習活動にも関わってはいるが、主に学習活動の説明、学習規律の確立、児童の発表の支援等に多く従事しており、それぞれの立場を生かした役割分担をしながら効率的・効果的に授業を進めていることが分かる。

表 6 それぞれの授業形態における指導体制

| ①学級担任による授業 | | | ②専科教員による授業 | | | ③ゲストティーチャーとのTTによる授業 | | | ④実教教育支援コーディネーターとのTTによる授業 | | |
|------------|------|------|------------|------|------|---------------------|------|------|--------------------------|------|------|
| | 専門指導 | 学習指導 | | 専門指導 | 学習指導 | | 専門指導 | 学習指導 | | 専門指導 | 学習指導 |
| 担任 | ○ | ○ | 担任 | | | 担任 | × | ○ | 担任 | ○ | ○ |
| | | | 専科 | ○ | ○ | G T | ○ | × | 実 コ | ○ | ○ |

可能な範囲で関わり、学校全体における音楽活動の活性化にも大きな役割を果たした。

これらの効果は、学校での OJT が有効に進められていたことを示すものでもあり、学級担任をはじめとする現職教員とコーディネーターとの協同的な指導体制の連携によって、教師の苦手意識がネガティブな「潜在的カリキュラム」として児童に与える影響が減少し、

徐々にポジティブな学習環境の構築・形成が図られるようになった。もちろん今回の取り組みは、現職教員だけではなく、コーディネーターにとっても小学校現場での生の教育活動を通して教育実践力の基礎的な資質を身に付けることができる大変貴重なプロジェクトであった。

ただ一方で、このような教育支援体制を制度として確立させるためには、教育現場においては教員定数や

人件費の確保、学校運営や時間割の組み方等々、多くの課題があげられる。大学側も、今回の取り組みを通して徐々にその効果が見られるようになってきたこの段階でプロジェクトを終了してしまうことになるが、教員養成大学である福岡教育大学の特性を生かして、大学と学校現場、教育委員会等との有機的な連携事業の推進を図り、教員養成から現職教員の研修までを含んだ「実践知」習得を基盤とした教育支援体制を構築していくことは、今後一層求められるところである。

音楽や図画工作のような芸術教科は、他教科と比べて授業時間数が非常に少ない中ではあるが、子どもたちに社会生活を営む上で必要とされる知識・技能・態度を身に付けさせるとともに、豊かな人間性をもち感性を働かせ生活を明るく潤いのあるものにし、社会に主体的に参加するための不可欠な資質や能力を育成する教科であるということを、実感をもって社会や学校現場に強く主張していくことがますます重要となる。そのためにも、このような取り組みをこれからも推進

していきたいと考える。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、資料等を提供いただきました関係の皆様方に深く感謝の意を表します。

参考文献

- ・奥田真丈他編（1996）『学校教育辞典』 教育出版
- ・東 洋他編（1998）『現代教育評価事典』 金子書房
- ・木村次宏（1998）「小学校教師の音楽科学習指導に対する意識」『福岡教育大学紀要』 第5分冊 pp.1-13.
- ・黒木瑠美子（2011）「小学校における課題と教員養成への提言」『平成22年度 全日本音楽教育研究会 大学部会 会誌』 p.81.
- ・小林田鶴子他（2011）「教員養成段階における実技教科指導内容の検証」同上書 pp.61-69.